

徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

渡辺重明「在りし日の駿府城」(平成の駿府城をつくる会提供)

静岡大学名誉教授・文学博士

小和田哲男氏

Tetsuo Owada



経歴

1944年(昭和19年)静岡市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。1973年、静岡大学教育学部講師、助教授、教授を経て2009年、定年退職。現在、同大学名誉教授、文学博士。専門は戦国時代史。NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」の時代考証をつとめた。

リーダーとしての徳川家康の魅力

戦国武将は、その名の通り武将であるが、同時に自分の領国を支配する経営者でもあった。単に戦に強いだけでなく、領国経営の面でもその資質が問われており、リーダーシップといった観点からも戦国武将を評価する試みが行われている。

従来、そうした戦国武将ランキングは、どちらかといえば、人気度が主であった。ところが最近では、実力を評価する動きとなり、徳川家康は上位にランク付けされるようになってきた。

リーダーとしての家康の魅力の一つはその安定感にあったと考えている。いかなる危機・困難に陥ったときも、あわてふためかず、泰然自若としていた。た

とえば、永禄三年(二五六〇)五月十九日の桶狭間の戦いのとき、家康は高城にいて、今川義元の到着を待っていた。ところが、義元は途中で織田信長の奇襲をうけて討たれ、夜になってそのしらせが家康のところに入った。

そのようなとき、ふつうならば、大あわてで、大高城を出て、三河に逃げもどるところであろう。ところが、家康は、翌日、明るくなつてから大高城を出ているのである。暗い中を逃げていけば、落武者狩りにあう危険が高いことを知っていて、そうした行動をとったのである。このとき、家康はまだ十九歳だった。

魅力の二つ目は、家康のみことな組

織づくりである。それに決断力が加味される。天正十三年(一五八五)、家康の重臣の一人石川数正が豊臣秀吉に引き抜かれるということがあった。当然、三河以来の徳川軍法は秀吉側に筒抜けになる。すると、家康は、躊躇せず、三河以来の軍法を捨て、武田軍法に切り換えているのである。

実は、家康家臣団は、三河以来の譜代部将が主力ではあったが、自分が滅ぼした今川氏や武田氏の遺臣をかなり採用していたのである。包容力が大きかったといつてよい。しかも、今川遺臣・武田遺臣の能力を判断し、適材適所の人事にも心がけていた。武田遺臣の一人大久保長安が鉾山開発の特殊な才能をもっているのを見ぬき、佐渡金山・銀山や石見銀山の奉行に抜擢したのなどはその例である。

魅力の三つ目は、その先見性である。

将来構想力といいかえてもいい。家康の愛読書の一つが『吾妻鏡』だったことはよく知られている。この本は、源頼朝によつて鎌倉幕府が樹立されていく過程とその後について記されたもので、家康は人生の目標を頼朝に置き、秀吉に臣従を余儀なくされていたときも、「いつかは頼朝のように幕府をつくりたい」と考えていた。人の生き方として、この人生の目標をもった生き方は、現在のわれわれも学ぶべきだと考えている。

「安定した幕府をつくり、戦乱のない世の中にした」という家康の最終目標は、「元和偃武」として確立された。これは、「武器を蔵に収めて用いない」の意味である。厳しい戦いを経験した家康だからこそ描いたビジョンだったといえる。



私の一文字

小和田哲男さんが選ぶ
徳川家康公を表現する一文字。

家康は日本の歴史だけでなく、中国の歴史や政治論をよく学んでいた。学ぶことで自分の人生の指針としたのである。

学

著書のご紹介



「詳細図説 家康記」

新人物往来社 1680円(税込)

詳細図説シリーズ第3弾。徳川家康の誕生からその死までの全生涯を描く詳細な伝記。全ての事項に出典を明記し、信憑性の高い記述と豊富な図版で初心者にもわかりやすく家康の実像に迫ります!